

 B. 各支部から

富山県支部の歴史と現状

富山県小児保健協会支部長
高志リハビリテーション病院小児科
本 間 一 正

昭和32(1957)年に、北陸小児保健協会が発足し、金沢大学小児科学教室に事務局が設置された。以来、石川、福井、富山の3県持ち回りで年1回の北陸小児保健学会が開催されるようになった。その後、各県に医学部・医科大学が設置され、小児保健協会が支部を各県単位で設置することを呼びかけるようになった。これらの状況を受けて、富山県では昭和58(1963)年4月に準備会が発足、翌年4月に富山県小児保健研究会(会長：江本清和・富山赤十字病院小児科)が発足した。以後、毎年3回程度の研究会などを経て、昭和61(1986)年に正式に富山県小児保健協会(日本小児保健協会富山県支部)が発足した。準備段階から奔走されたのは、富山県黒部保健所長(現・新川厚生センター)の飯田恭子先生で、実質的に事務局を努められ、さまざまな職種や機関の連絡調整に多くの困難があったと聞いている。

支部発足に伴い、初代支部長は岡田敏夫・富山医科薬科大学(現富山大学医学部)小児科教授(平成13年退官)が就任し、事務局も同教室に設置された。以後、年2、3回の富山県小児保健学会が開催されていたが、残念ながら、事務局の過重負担や参加者が減少して、運営が次第に行き詰まったことから、平成13(2001)年の第40回研究会以降は年1回開催とし、主要テーマに基づいて一般演題と、シンポジウム、特別講演を組み合わせるなど内容を充実させることとした。併せて平成14(2002)年から機関誌「富山小児保健」を年1回発行することとした。

なお以後の会長(支部長)は、摂津浩二先生(摂津小児科医院・13～21年)、本間(富山県高志リハビリテーション病院・～現在)と続いている。また各大会の学会長は富山大学小児科学、保健医学、小児看護学、の各教授に交代で務めていただくこととして現在まで続いている(来年度から公衆衛生学教室にも参加を依頼)。

最近の学会への参加者は100名前後となっている。ちなみに、平成22年度の第49回富山県小児保健学会は、10月3日開催、「小児の睡眠」をテーマに、一般演題、シンポジウムに加えて、三池輝久・兵庫県小児睡眠障害医療センター長の特別講演を開催、盛況であった。なお最近5年間のテーマは、21年度「こどもの健康格差」、20年度「発達障害」、19年度「メディアと子ども」、18年度「児童虐待防止のための地域ネットワークづくり」などとなっていて、いずれも一般演題、シンポジウム、特別講演の編成で行っている。

来年度から本格化するエコチル(子どもの健康と環境に関する全国調査)が開始され、富山大学にも拠点が置かれることになったことから次年度より公衆衛生学教室にも参加していただくこととなっており、随時情報提供をしてもらうことにしている。

当支部の課題としては、会費納入会員が140名程度で伸び悩んでいること、小児科医の参加が少ないことである。引き続き、富山県の小児保健に関して情報発信を続けることで、課題の解決、行政との連携なども深めていきたいと願っている。